# Case Study of Therapistic Private Teacher


| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2017-10-03<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者:<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | http://hdl.handle.net/2297/642 |

# Schizotypal Personality Disorder の高校生に対しておこなった治療者的家庭教師の事例

萱 原 道 春

## Case Study of Therapistic Praivae Teacher

Michiharu KAYAHARA

## は じ め に

本事例は Schizotypal Personality Disorder あるいは潜伏分裂病と診断された男子高校生に，筆者が大学院生の頃，治療者的家庭教師として関わった事例である。

治療者的家庭教師については村瀬（1979）の研究があるが，本事例独自の展開をみせた部分も多いので，ここに報告したい。

## 事　例

### 1　事例の概要

筆者が本事例を受け持った時，子ども（以後，政彦と呼ぶ）は17歳であった。学年で成績が最低という極度の学業不振のため，公立高校普通科2学年に留年によって再度席を置いていた。

父親は51歳。旧帝大の工学部を卒業し，有名電機メーカーの支店長を勤めている。朴訥な喋り方であるが，自分の思ったことは他者が何と言おうが変えない非常に頑固な面がある。実家は教育一家で，兄弟姉妹はみな大学卒である。

母親は45歳。学歴は高校卒である。「結婚以来家族みんなで旅行に行ったことなど一度もない」と，夫に対して相当不満を抱いているようである。夫が的外れなことを言うと，馬鹿にした様子で話を取って喋りだすが，話の主題はいつの間にか変わっており，はっきりとした自己主張をおこなっている印象はない。専業主婦であったが，現在は近所のスーパーにパートで勤めている。「政彦が学校から帰ってきて二人になると，政彦に対する罪悪感を感じるから」という理由である。

きょうだいは3歳上の大学生の兄が一人おり，現在は家を離れて生活している。

政彦は生まれた時から，やんちゃで手のかかる兄とは対照的に，母親からの働きかけに対しても反応を示すことが少なかった。そのため母親の関心は兄に向けられ，政彦は一人取り残されることが多かった。つぎのようなエピソードがある。3歳になる政彦と兄を連れて，母親が近所の家を訪問しようとした。その時政彦が嫌がったので，母親は夕闇迫る薄暗い家の中に政彦を一人残して出かけたが，政彦は泣くこともなかった。このように，政彦は小さい頃から母親にとってよく分からない存在だったという。そして，母親はその点で政彦と夫を同一視していたようである。つぎのように母親は語っている。「夫は政彦があまりに自分と似ているから，政彦を嫌うのだ。夫の母親などは，お兄ちゃんよりもわが子に似た政彦を可愛がる」。

小学校に入学しても，政彦は相当変わった子どもだったようで，学校の廊下にウンチをして喜んだり，度の外れた悪戯をよくしていた。児童相談所では自閉症と診断されたこともある。学校ではこのように悪戯をしたい放題していたが，家に帰ると母親がつきっきりの状態で，2時間ほど勉強させられる毎日であった。政彦が聞いていようがいまいが関係なく，母親はやっきになって勉強を教える。理解の進まない政彦

平成10年9月14日受理

の耳を引っ張って「どうしてこんな問題が解けないの！」とののしったり，髪をつかんで机に額を打ちつけたりすることもよくあった。

小学5年生の時，政彦は家の引っ越しに伴って転校する。そこでクラスメートから授業中にいじめを受けるが，担任の先生はただ見ているだけだったと言う。この経験は，誰も助けてくれないという思いを政彦の心に刻みつけたようである。

中学時代はサッカー部に所属し，勉強も公立高校普通科に合格するだけの力をもっていた。しかし，高校に入学すると，授業中まったく勉強に集中できなくなり，一日中教室の天井を見つめているといった状態がつづいた。このため成績は全科目学年最低となってしまう。両親が政彦に口うるさく言った結果，政彦は両親と口をきかなくなり，すべて筆談で済ませるようになってしまった。なお，学校では政彦は4，5人のクラスメートから再三にわたっていじめを受けていた。政彦がまったく反抗しないためいじめはエスカレートし，顔面を思い切り殴られたり，水洗便所に頭を押さえつけられて水を飲まされたりしていた。

学業不振のため2学年への進級はむずかしかったが，学校側の配慮でなんとか2学年に進級する。しかし，このままでは3学年に進級できないということで，両親が政彦を連れて総合病院神経科を受診させた。問診の結果，一時は好きなジェット戦闘機が飛行する幻聴を呈していたことも明らかとなり，Schizotypal Personality Disorder あるいは潜伏分裂病との診断を受ける。そして，政彦と両親のカウンセリングが開始された。カウンセラーは家庭内環境の調整の重要さを感じ，両親に対して「政彦君に勉強しろと圧迫をかけないように。政彦君が自由に振る舞える環境づくりを」とアドバイスを繰り返すが，両親の受け容れは悪く，カウンセラーも「政彦が自殺未遂でもしないと，政彦の辛さはわかってもらえないのか」と呟いてしまうほどであった。なお，カウンセラーによる面接が開始されたのと同時期，政彦に男性の家庭教師がつけられた。カウンセラーはこの家庭教師と会い，「家庭教師は名目だけにして，実際には話し相手になるように」とアドバイスを与えた。彼もこれに従って熱心に政彦に接した結果，学校でも家庭でも話し相手のいない政彦の大きな支えとなった。しかし，進級問題が迫った2月頃になると政彦に焦りが生じ始め，期末試験のある3月になると勉強が手につかない，眠れない，食べれないといった状態がつづいた。3年への進級はかなわず，留年が決定する。この結果，両親は家庭教師をやめさせてしまった。この時点でカウンセラーから筆者に治療者的家庭教師の話がもちかけられたのである。

## 2　面接経過

カウンセラーと筆者（以後，TPT : therapistic private teacher と呼ぶ）はつぎのような治療方針を設定した。a）TPT は週2回政彦の家に訪れ，積極的に政彦を遊びに誘うなどして，勉強以外のことに政彦の関心を向けさせる。b）カウンセラーは引きつづき両親面接をおこなって，両親の態度を改善させるように働きかける。c）TPT は政彦の家庭に入っても家族全体の治療者という立場はとらず，両親の問題はカウンセラーに任せる。

面接経過は3期に分けることができる。TPT が積極的に政彦を遊びに連れ出し，徐々に政彦が元気になっていった時期（第1期），元気になった政彦に対して，両親が勉強の圧力をかけるようになり，それに抗する TPT と両親の間で政彦が揺れ動いた時期（第2期），TPT と両親の対立が解決しないまま，政彦が TPT のもとを離れていった時期（第3期）である。

**第1期（＃1～28：政彦を遊びに連れ出す）**

初対面の政彦は硬い目つきでジーッと TPT の顔をのぞき込む。中肉中背，髪は坊主頭がそのまま伸び放しといったかんじでむさ苦しい。勉強部屋には，好きな戦闘機のポスターが無造作に貼り付けてある以外はこれといった装飾も

なく，殺風景。時計が大小合わせて4～5個置いてあり，TPTにはこの部屋にいると無機的な時間が流れていくように感じられた。政彦は机の前に座っているだけで，まったく勉強には集中できない様子である。何度か顔を歪めてしかめ面をしたり，独語をつぶやく。一方母親は，初回早々「勉強のコツを教えてやってほしい。この子は毎日4時間は勉強している」とTPTに言ってきた。「カウンセラーとご両親の間で，私は政彦君の話し相手として雇われるという話がつけられているはずですが」と答えると，それ以上は言わなかったが，母親はたいへん不満そうな様子をみせた。父親はTPTの言葉に一応納得している様子であった。

4回目からTPTは政彦を散歩やキャッチボールに誘い出した。政彦は嫌がる様子もなくそれに応じた。バッティングセンターへは政彦の希望によりTPTの単車に二人乗りして出かけた。初めて単車に乗ったという政彦の声は今までになく生き生きとした感情がこもっていた。そして政彦は次第にTPTに心を開きだした。「このことはカウンセラーにしか話したことがない」と言って，中学，高校とクラスメートからいじめを受けていたことを述べ，「その時はクラスの誰も助けてくれなかった。味方はいなかった」と，ほんの少しではあるが目頭に涙を浮かべた。また，小さい頃からのアルバムをもって来て，頁をめくりながら記憶の断片を思いつくままに話すこともあった。驚いたのは，小学校，中学校時代のテストをほとんどすべて保管していたことで，これもまたアルバムと同じように政彦は逐一説明をする。その説明を聞いているTPTは退屈さを禁じ得なかったが，勉強に全生活を占領されていたそれまでの政彦の人生を直接感じる機会となった。

政彦を遊びに連れ出すTPTを内心苦々しく思っていた母親も，TPTに連れられて以前の家庭教師に会ってきた政彦の嬉しそうな様子を見て，「最近明るくなった。勉強のことについてもすべて先生にお任せします」と，TPTに対する態度を軟化させるようになった。そして，それまでは休憩時間に何も出なかったのが，キャッチボールから帰ると冷やしたトマトが用意してあったりして，待遇も良くなる。「一日中家の中でいたら鬱陶しくてたまらないので，スーパーにパートで行っているんです」と，TPTに愚痴を聞いてもらいたい様子を見せることもあった。しかし，定期試験や模擬試験の結果が惨澹たるものであると，その度に「少しでもいいから勉強の方も」と言ってくる。これに対しTPTは「今は勉強のことは不問にしましょう」とだけ繰り返し，「お母さんの焦りや苦しさをカウンセラーに話してみては」と示唆するが，「カウンセラーには相談しにくい。カウンセラーの言うことは抽象的すぎてよく分からない」と暗にカウンセラーを非難し，つぎのように話をつづけた。「主人は兄の方に国立大学に行くことを期待していたけど，その通りにはならなかった。その夢を政彦にかけていたことがある。私は中学の頃から勉強について政彦にはあまり期待していなかったし，うるさくも言わなかった」。このように，母親は政彦に勉強の圧力をかけている事実を認めようとせず，責任を夫に負わせ，TPTには自分の言い分を認めてもらいたい様子であった。だが，「分裂病の孫が大学教授の祖父を殺した事件があったけど，私も政彦がなんか恐い」とTPTに訴えたことがあり，心の片隅では政彦に対する自分の接し方のまずさを感じていることが推測された。なお，このことに関して，政彦は後にTPTに次のように語っている。「いい面もあるから，親を殺そうとまで思わないのだ」。

さて，最初のうちは政彦の勉強について何も言わなかった父親が，2ヶ月ほど経った頃から，「政彦には勉強する意欲がない。克己心がない」と，自分の考えを頑固に主張し始めた。TPTは父親の説得にあたり，この時はなんとか父親からの圧力を食い止めることができた。政彦は徐々に元気を増し，夏休みには自衛隊の3泊4日の体験入学に参加するほどになった。

**第2期（#29〜60：両親とTPTの間で揺れ動く）**

夏休みの終わる8月末日，それまでほとんど進んでいなかった英語のワークブックを，政彦は徹夜をして一日で仕上げた。正答もかなりある。それまでも政彦の精神状態はかなく良くなっていると感じていたTPTであるが，この出来事には驚いた。同時に，この出来事は「やればできるのに，これまでは怠けていたんだ」と両親に思い込ませる結果を招いてしまった。両親は勉強しろと圧力を強め，政彦はこれに抗する術もなくたちどころに「クソー負けてたまるか。入試に受かってやる」と独言を言いながら机にかじりつくようになってしまった。TPTに話す内容も成績や大学受験のことに限られ，それはほとんど妄想といってよく，判断力が著しく欠如している。「あっという間にまた最初の状態に逆戻りだ」と，TPTはあっけにとられ，そしてがっかりした。さらに「そっちに払う金がもったいない気がする。そっちがいるとかえって勉強に集中できない」と政彦に言われ，TPTはやるせなさを感じるとともに，怒りも禁じ得なかった。政彦に対する怒りは，カウンセラーから政彦の分裂機制について指摘を受けた結果解消されたが，家族に対する怒りは残った。政彦から「勉強も教えずに話ばっかりして，あの人の学費を出してあげているみたいなものよ」と母親が言っているという話を聞いた時，TPTは母親に対してつぎのように反応した。「勉強を教えにここに来ているのではない。お金もそのためにもらっているし，そう約束したはずだ」と，もう一度TPTの立場をはっきりさせるとともに，やや強硬な態度を母親に示したのである。

さて，この時期，政彦は勉強しろという両親に取り込まれる一方で，両親に対する不満を述べるようになった。「小学2年の頃から母親につきっきりで勉強させられ，できないと母親は耳を引っ張って罵ったり，机に額を打ちつけた」「母親は平気で約束を破る」など，徐々に怒りの感情を伴って政彦は語りはじめた。両親と自分の間にTPTをおいて，両親に向かって不満を述べたこともある。この時は，母親は話の筋を折ってわけの分からないことをまくしたて，父親はがんとして自分の主張を譲らなかった。政彦が勉強に集中できないので断食によって集中力をつけようとした時も，両親は政彦の焦りを理解せず，母親は「そんなエネルギーがあるのなら勉強したらどうなの」と言い，父親は「そんなことをするのなら首をくくって死んでしまえ」と言う。その場はTPTの説得でなんとか断食を中止させることができたが，「両親を変わらすにはどうしたらいいのだろう」とポツリとTPTに問いかけてきた政彦の言葉が印象に残っている。

しかし，「お前は病気なんかじゃない。怠けているんだ」という父親の言葉一つで「自分は怠けているんじゃないかと思う」と政彦は言い出すのだった。政彦の苦しさを分からないひどい両親だと思うTPTと，勉強させない家庭教師なんて前代未聞だと言わんばかりの両親の間で政彦は揺れ動いた。それと軌を一にするが，政彦の中の両親像もまた分裂した。それはつぎのエピソードが示している。ひとしきり両親の悪口を言った後，唐突な感じで，両親から良くしてもらったことを思い出して目頭を熱くすることを，政彦は何度か繰り返した。「いい面があるだけ余計しんどいんだね」というTPTの言葉に対しても，「まあ，そんなもん」とそっけなく答えるだけであった。

そのような状態ではあったが，多少なりとも両親の言うことに逆らって自分の意見を持つことができるようになった印象を，この時期TPTは政彦に対して感じるようになっていた。

また，この時期，政彦は学校においても活発な行動を示すようになった。担任は「最近の政彦はポッと行動に出たりして活動的になった。以前はクラス内でほとんど喋らなかったのに，よく発言するようになった」と言っている。た

とえば，ホームルームの時間を抜け出して以前通っていた中学校に遊びに行ったり，クラス全員が自己紹介をする場面で，40分間近く自分の生い立ちを語り，後の者は時間がなくなってしまうということもあった。このように行動的になったため政彦の奇妙な一面が一層クラスメートの目につくようになり，運動会のフォークダンスで政彦とあたった女生徒が嫌がって泣いてしまうということが起こった。この出来事を政彦は憤懣やるかたないといった感じでTPTに語った。そして，昔いじめられたことを思い出しては，以前よりも強い怒りの感情を伴って語るようになっていった。

このような変化が政彦には見られたが，母親の態度は相変わらず一貫性がなかった。2学期の中間試験の結果が出て，担任から「進級は無理でしょう」と言われると，政彦に「もう学校はやめなさい。アルバイトの口でも探してあげようか」と言う。政彦はこの言葉を真に受けて，冬休みにはスーパーマーケットでバイトをするつもりであるとか，料理学校に体験入学してみたいと言い出す。また，母親が森田療法の記事を見て，ほんの思いつきで「森田療法を受けて見たら」と言うと，その後1ヶ月間ほどしきりに森田療法を受けたいと政彦は言った。結局，バイトの件も森田療法の件も，母親は自分から言い出したにも関わらずすぐに忘れてしまい，母親の言葉に乗った政彦は，そのことで母親に腹を立てることになった。一方，父親は「政彦は病気じゃない。やる気がないのだ。勉強の仕方がまずいんだ」の一点張りで，しつこく勉強しろと繰り返す。酔ってこれを繰り返す父親に政彦はたまらなくなり，「自分は病気じゃないから，ぼくの苦しさが分からないんだ」と言い返すと，怒った父親がお盆を投げつけて障子に穴をあけ，母親が政彦を避難させることがあった。

当初の治療方針より，TPTは両親を変化させるような働きかけはしないつもりであった。また，どうしたって両親を変えることは無理だという半ば絶望感から，政彦につぎのように言っている。「ぼくもカウンセラーも，両親には何回も政彦君に勉強を押しつけるなと言っているけど，一向に聞き入れてくれない。ぼく達がいても，やっぱり政彦君に圧迫がかかっている。せいぜいぼくが来た時に両親に対する愚痴や悩みを言って，ぼくを利用しなさい。両親がいくら圧力をかけてきても，それを真正面から受け取らずに，聞き流すくらいの気持ちでいてほしい」。

**第3期（#61〜78：もう相談相手は必要ない）**

2学期の期末試験ではかなり成績があがる。それまで一桁台ばかりだったのが，10点，20点，30点，そして1科目だけ50点台があった。担任も「この調子で行けば留年をしなくていいかもしれないので，冬休み明けのテストで頑張るように」と母親に伝える。これを受けて母親は，少し前まで「学校なんてやめて働いたらどうなの」と言っていたのに，手の平を返したように勉強しろとうるさく言うようになった。政彦は「うるさい」と怒鳴って母親の言葉をはねつける。そして，TPTに対して「自分はどういう病気なのか」と問う。TPTが「勉強しなければ，と苦しんでいるのが病気なのだ。両親は病気じゃないと言い，政彦君も自分は怠けじゃないかと思っているようだけど，どんなに苦しんでるかは政彦君自身が一番よく知っているはずだ」と答えると，政彦は2，3回目頭を手で拭う。そしてこう言った。「自分はやっぱり病気じゃないと思う。カウンセラーにもそう伝えてほしい。でも両親にはこのことは絶対喋らないでほしい。そうすれば，勉強，勉強と一段とうるさくなって，こちらはたまらないから」。TPTは政彦のこの言葉を聞いて，TPTから離れて一人でやっていこうとする政彦の決意のようなものを感じた。次第にTPTに話し掛けてくることも少なくなり，政彦は一人机に向かっている時間が多くなっていった。そして，政彦はTPTにつぎのように述べた。「家庭教師は今

月一杯でいい。父親は最初は心の相談相手にそちらを雇ったのに，今では勉強のための家庭教師と見ている。いくら集中力がつかないと言っても信じてもらえない」「そちらはヘレンケラーとサリバン先生の，サリバン先生みたいなもんよ。厳しい訓練をするので両親からやめてくれと言われる。でも，その後も無給でやって来る」。TPTが「政彦君も，ぼくに無給でやって来てほしいのか」と問うと，政彦は「別に。それに，そんなことをしたら，両親が勉強の邪魔をしてと言うだろう」と答えた。

さて，この時期，父親は「政彦は病気じゃない。やる気がないのだ。勉強の仕方がまずいんだ」という自分の思い込みにしたがって，積極的に政彦に関わりはじめた。何冊も数学の参考書を買ってきて政彦に渡し，「勉強の仕方が分からないんだろう。お父さんと一緒に問題を解こう」と言ったり，政彦をゴルフに誘ったりした。後者に関しては，遊びに誘うのはよいのだが，行く途中勉強の話をするため，政彦は「こんな所に来てまで勉強の話をする」と，クラブを放り投げて帰りたい衝動に駆られたりするのであった。

父親としては，最初はカウンセラーやTPTが政彦は病気だと言うのでそれを信じようとしたが，やればテストだってできるし，もう病気なんかじゃないという強い信念を作り上げていたのであろう。この頃には政彦は悪くなる以前の状態，いわばベースラインの状態に戻っていたため，ベースラインそのものの病理性を父親に分からせのは難しいことであった。TPTは政彦から，父親が「あんなの辞めさせろ」と言っているということを聞いていたが，気分を害する以上に，父親の頑迷さに対する諦めを感じていた。

学年末テストで，政彦の成績はクラス42人中40番にまで上がる。英語などは政彦より下の点数の者が10人いるという状態にまでなった。進級もほぼ確実となる。そして政彦が「話し相手としても，そちらは必要ない」と言うので，TPTはカウンセラーと相談した結果，この辺りが潮時と，訪問を打ち切ることにした。そして，政彦に対して「まだ一人でやっていくのはきついのだから，両親から圧力をかけられてしんどくなったら，カウンセラーの所へ行くように」と伝えた。最終回，政彦はシャープペンとマーカーペンを記念としてTPTにくれた。TPTが「この1年間，ぼくが来てどうだった」と尋ねると，「別にどうてことはない」と答える。政彦の心の中でTPTのイメージは十分に統合されていないのだろうと理解していたので，TPTはさほどがっかりすることなく政彦と別れることができた。

**その後の経過**

TPTが訪問をやめた後，カウンセラーによる面接が両親に対して数回おこなわれたが，そこで中断となった。数ヶ月後カウンセラーが電話でフォローアップしたところ，政彦は無事3学年に進級でき，春休みには一人で父親の実家に旅行し，その際に東京や関西の有名大学を見学してきたとのことであった。また，母親が言うには，父親が相変わらず勉強しろと言っているが，政彦は状態を崩すことなく学校に通っているとのことであった。

それから数年後，助手として母校の大学で勤めていたTPTの研究室に，夕方突然政彦が現れた。二人で店に行き，お好み焼きを食べながら政彦の話を聞いたところ，高校卒業後政彦は自衛隊に入隊し，かねてからの夢であったジェット機に，操縦士としてではないが乗務しているとのことであった。そしてお好み焼きを食べ終えると，政彦は帰っていった。「久しぶり」とか「じゃ，また元気で」といった，通常の情緒が交わされた再会ではなかった。

政彦と自分の関係を顧みて，TPTはいま次のように感じている。それは過去から未来につづく時間のなかで描かれた，メロディアスな情緒の軌跡ではなく，時間の流れの底に沈殿し，時間の流れとは無関係に残された関係のようである。

## 考　察

### 1　自我境界の強化

勉強にまったく集中できないという政彦の問題が生じたのは高校に入学してからであった。その原因を，内因的原因あるいは心理的原因のどちらか一方にのみ求めるのは難しい。両要因が複合しているであろうと仮定した上で，心理学的な側面に限って原因を考察するならば，それは親に対する政彦の自我境界の脆弱さに求めることができる。

小学生の頃より政彦は親から勉強の圧力をかけられ，その影響下に自身の自我を晒されつづけてきた。政彦のこれまでの人生が勉強一色に塗りつぶされていたことを TPT が実感したのは，政彦が小学校，中学校時代おこなったほとんどすべてのテストを保管してあり，それらテストの一枚一枚を逐一 TPT に説明した時であった。そして TPT との面接経過でも最初のうちは，親から勉強の圧力がかかると政彦は全面的にその影響を受け，自身の態度を一変させた。「勉強しなければならない」という親の考えが，そのまま政彦の考えになってしまうことが示された。これらの事実が，政彦の自我境界の脆弱さを示している。

本事例が治療効果をあげたのは，政彦の自我境界が強化された結果であると考えられる。政彦の家族の中に入って行った TPT は，中立的な立場ではなく終始政彦のサイドに立ち，防波堤（代理の自我境界）となって両親の圧力から政彦を守った。その中で政彦は徐々に自身の自我境界を強化していったと考えられる。防波堤が外海から押し寄せる波を完全に遮るのではないと同じように，押し寄せた高波に政彦は何度か揺れた。親からの圧力が強まり，両親と TPT の間で政彦が揺れた第 2 期がその時期である。しかし，このように揺れ動いたからこそ，政彦の自我境界は鍛えられ強化されたと考えることができる。

政彦の自我境界が強化されたことは，親に逆らうことができるようになった事実に示されている。たとえば次のようである。「政彦は病気じゃない。やる気がないのだ。勉強の仕方がまずいんだ」と，酔ってしつこく繰り返す父親に対して，「自分は病気じゃないから，ぼくの苦しさが分からないんだ」と言い返したり（第 2 期），「勉強をやめて働いたらどうなの」といやみを言っていたのに，進級の可能性が見え始めると手のひらを返したように再び勉強しろとうるさく言い出した母親に対して，「うるさい」と怒鳴り返したこと（第 3 期）に，それは示されている。

さて，相手の言をはねかえす原動力となるものは怒りである。上記のように親に対する怒りを表現できるようになると，むかしクラスメートにいじめられた体験についても，政彦は強い怒りの感情をもって語るようになった。政彦の自我境界は，自身の怒りを表現する過程と軌を一にしながら，強化されていったと考えることができる。

以上，自我境界の脆弱性とその強化という観点から，本事例の問題発生とその克服過程を考察した。なお，ここでは両親との関係という心理学的な側面に焦点を絞って自我境界の脆弱性について考察したが，分裂病圏の対象が内因的にもつ自我境界の脆弱性（作為体験等につながる，記述精神医学でいうところの自我障害）が素因として存在するであろう，と筆者は考えている。

### 2　TPT の非中立性

TPT（治療者的家庭教師）は相手の家庭の中に入っていくため，好むと好まぬとに関わらず家族全体を相手にせざるを得ない。そこで，どのように相手をするかということが問題となる。

本事例では，TPT は家族全体の治療者という立場はとらず，両親の問題はカウンセラーに任せるという治療方針を立て，それに従って行

動した。この結果，TPTに愚痴を聞いてもらいたい様子を見せた母親（第1期）に対して，TPTは十分な受容を示さなかった。後に母親が「勉強も教えずに話ばっかりして，あの人の学資を出してあげてるみたいなものよ」(第2期）と言っているのも，このときのTPTの態度に対する反応として理解できるだろう。もし，家族全体を相手にするという治療方針を立てていたなら，本事例は当然別の展開を示していたであろうし，家族を変化させることによって得られる治療効果もあったかもしれない。ともあれ，家族を変えることができなかったのは本事例の不足点である。しかし一方，それ故に政彦の自我境界を強化することができたと考えることもできる。それは先に，高波を受けたからこそ政彦の自我境界は強化されたと考察したとおりであるが，それにつぎの考察をつけ加えることができる。

小此木・石原（1983）は“家庭訪問は家族内の悪い部分をさらけ出すきっかけになる場合も多い。それだけに，こうした侵入者は家族にとって害虫のような存在になりうる可能性がある”と言っている。本事例のTPTもまさしく両親から「害虫」扱いされた。そして，害虫扱いされたTPTはそれに反応して両親に怒りの感情を向けた。さて，政彦の自我境界の強化は怒りの表出と軌を一にすることは既に述べたが，このプロセスにおいて，政彦は怒るTPTに同一化し，それによって自身の自我境界を強化することができたのではないか，と考えられるのである。

治療者的家庭教師は，本事例がそうであったように，学生など心理臨床の初心者があたる場合が多いであろう。そのため家族全体を相手にするのは荷が重過ぎるという消極的な理由から，家族全体は相手にしないという治療方針が立てられる場合も多いと思われる。しかし，上述したように，家族の中にあって中立的な立場をとらないことによって，TPTは子どもの同一化の対象としての性格を強め，それが治療効果を促進する場合もあると考えられるので，そのことを指摘しておきたい。

### 3　分裂機制について

面接経過でも述べたように，政彦のなかにあるTPTや両親の対象イメージは分裂していた。つまり，それぞれの対象イメージは，肯定的イメージと否定的イメージを併せもつ一つの統合された対象イメージにはなっていなかった。

しかし，境界例に顕著にみられるように，否定的イメージが肯定的イメージを食い荒らして治療を困難にするということは，本事例ではなかった。筆者は面接経過の最後でつぎのように述べた。

“政彦と自分の関係を顧みて，TPTはいま次のように感じている。それは過去から未来につづく時間のなかで描かれた，メロディアスな情緒の軌跡ではなく，時間の流れの底に沈殿し，時間の流れとは無関係に残された関係のようである。”

TPTの肯定的イメージは政彦のこころの中に，色彩豊かではないがある種の存在感をもって残されたのではないかと感じるのである。

## 文　献

村瀬嘉代子　1979　児童の心理療法における治療者的家庭教師の役割について　大正大学カセリング研究所紀要，2，18－30.

小此木啓吾・石原潔　1982　家族診断理論とその方法　加藤ほか（編）講座家族精神医学4家族の診断と治療・家族危機　弘文堂　Pp.7－76.